

Title	アフリカ農耕民の生活世界の編成に関する研究 - ウガンダ中央部ガンダにおけるバナナのエスノサイエンス( Abstract_要旨 )
Author(s)	佐藤, 靖明
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2009-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/123868">http://hdl.handle.net/2433/123868</a>
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

( 続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	佐藤 靖明
論文題目	アフリカ農耕民の生活世界の編成に関する研究 ーウガンダ中央部ガンダにおけるバナナのエスノサイエンスー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ウガンダ中央部においてバナナを主食作物として農耕を営むガンダの人びとを対象に、彼らが高度に発達させてきたバナナの複雑な分類・栽培・利用体系を民族植物学的手法によって明らかにしたものである。</p> <p>東アフリカ大湖地方の標高 1,000m を越える高地には、主食作物であるバナナの栽培を基盤とする定住的な農耕が営まれる地域が分布している。本論文では、この地域において人とバナナが相互にかかわる具体的な場を生活世界と呼び、人びとのバナナに対する認識や実践について検討することを通じて人と植物の関係が多面的かつ実証的に明らかにされている。</p> <p>第 1 章は、アフリカ農耕民とそのエスノサイエンスに関する先行研究を概観し、人と栽培植物の関係をめぐって、これまで生活様式や民俗知識が固定的な体系として研究されてきたことを明らかにしている。知識や技術の体系を所与としてみるのではなく、いかなる関係によって組み立てられているのか、その編成に着目し、人と植物の関係を検討することの必要性を提起している。</p> <p>第 2 章は、バナナの栽培と加工・利用に関する作業の全体を記述するとともに、栽培と利用を特徴づける人びとの認識・行為とバナナの作物としての特性を対照して検討している。バナナ個体を大きく成長させるための洗練された技術がみられる一方で、収穫パターンはバナナの結実周期にしたがい、保存加工がおこなわれず、他のイモ類の栽培と組み合わせることによって安定した食糧供給が可能となっていることを明らかにした。利用面においては、バナナに高い文化的価値が置かれ、洗練された調理法が確立していたが、それは他の多様な作物の存在を許容するものであり、多様な主食の種類を求める嗜好と背反しないことが示された。</p> <p>第 3 章は、栽培下にあるバナナに対するガンダの人びとの多様な分類と認識の実態について、再現可能な実験的手法によって検討し、個々人の知識に重複や可塑性があることを前提にしたうえで、ガンダの人びとが保持するバナナ認識の詳細な記述をおこなっている。認識が実践される場面の徹底的な追跡を通じて、バナナの品種群、品種、系譜、個体といった類別的カテゴリーが、文脈に応じて使い分けられることを明らかにし、バナナの民族分類に関する知識には、固定的な分類体系として広く共有されるものと、位置情報や個人的な経験と結びつけられた共有度の低いものがあることを示した。</p>			

第4章は、品種多様性が実現されるしくみを検討し、多品種栽培の実態と品種の入手過程を分析している。バナナの多様な品種は各世帯に分散して保持されており、交換をとおして数十年という時間をかけて畑に蓄積していくことを明らかにしている。世帯における品種の入手は世帯の生成と継承のサイクルや土地のやりとりとも連動しており、社会的交渉を経ておこなわれることを明らかにした。また、長期にわたるバナナ畑の利用とそれを可能にする土地制度の存在が、ガンダの人びととバナナの間には結ばれた半永続的ともいえる生活世界の営みを支えていることを示した。

第5章は、バナナを中心に構成されるホームガーデンという空間の社会文化的意味がどのように編成されているのかを、民俗的な景観区分、空間内配置、時空間行動、労働分業、心象などについて分析している。バナナのホームガーデンが、他の作物の畑とは異なる空間カテゴリーとして表現され、ガンダの豊かな生活を象徴することが明らかになった。

第6章では、まず、ガンダの人びととバナナのとり結ぶ関係によって編成される生活世界の諸側面の概括をおこなっている。編成された生活世界の特質を、認識と実践の多様性、異なる要素や位相が混じり合う配置、そしてモノ、認識、経験、論理などを排除せずに付加していく「累加共存の傾向性」の3つにまとめて本論文の結論としている。

(論文審査の結果の要旨)

アフリカにおいて克服されるべき現代的諸問題のひとつとして、いかに粗放で効率の悪い遅れたアフリカ農業を近代化し改良するかは、開発学や農学の分野のみならずアフリカを対象とする研究分野において広く話題とされ関心を集めてきた。しかしながら、その農業を営むアフリカ農耕民の生活がいかに編成され実践されてきたかを明らかにする試みは僅かしかおこなわれてこなかった。

本論文の研究対象地域である東アフリカ大湖地方には、作物としてのバナナが千年以上も前に熱帯アジアから伝播して以来、長期間安定した食糧基盤を提供し、地域の人びとの暮らしを支えてきたバナナを主作物とする集約的な農業が営まれてきた。とくに人口の稠密なウガンダ中央部ガンダ地域におけるバナナの集約的な栽培とその利用実態には、遅れた農業というアフリカ農業の負のイメージを覆すのに余りある高度に洗練された農業実践とそれに関わる豊かな文化複合が備わっている。

本論文は、アフリカにおいて生業として農業を営む人びとの生活実践を、人とバナナの相互的關係に焦点を絞り、長期間のフィールドワークを通じて生態・社会・文化の深い理解に至る地域研究の研究アプローチによって多面的に明らかにした優れた研究成果である。

本論文の学術的な貢献は以下の4点にまとめることができる。

第1の貢献は、人と植物の相互的關係を扱った民族植物学のモノグラフとして、農耕を営む地域における生態と文化の深い理解に至っている点を指摘できる。特に、栄養繁殖するバナナという作物の植物学的特性と、定住的農耕民の生活実践の両者をふまえた厚い記述は農業の民族誌としても高い価値を認めることができる。

第2番目の貢献は、人びとによるバナナの分類と認識に関して、知識の個人差を徹底的に洗い出し、その差異の詳細な検討を通じて多品種現象に代表される作物多様性の実相に迫る実証的な資料を提出している点である。また、バナナの1個体から、品種、系譜、栽培される場としての畑内の集団まで、位相の異なる植物のまとまりに対して、ガンダ農耕民が同時に多様な關係性を維持している有様を、分類と認識に関する実践としてつぶさに観察報告した。これによって、これまで認識人類学やエスノサイエンス研究が資料不足のためほとんど取り組んでこなかった認識と実用をめぐり解釈を可能にした。その結果、民族知識を静態的な知識としてではなく、歴史的な変遷をふまえた動態的な実践として記述することに成功している点は高く評価できる。

第3番目には、多種、多品種の栽培が人間と近い関係性を保ちつつ実践される生活世界としてのホームガーデン（庭畑）の分析を通じて、あらゆる差異を取捨選択の対照とせず、微細な違いをも見逃さず、逆に残してしていくという「累加共存の傾向性」を指摘したことが、本論文の大きな学術的貢献のひとつとして評価できる。

アフリカ農耕民社会の研究において、人と植物の関係性の分析を通じて、モノ、認識、経験、論理などに関して、競合する他者との共存、あるいは異質な他者との並存を許す事例が実証的に報告されたのは本論文が初めてである。差異が競合を生みず、むしろ価値として蓄積されていく社会を発見したということが出来るだろう。

最後に、本論文がなした大きな貢献は、これまで、生態人類学、経済人類学、農業経済学等の専門分野が研究対象としてきたアフリカ農業に、生活世界という分析の場を設定して、その場の編成の特質を描き出すという、綿密な調査に基づく方法論的アプローチを見いだした点にある。地域に生きる人びとの深い理解に到達する方法として、生業を焦点とする地域研究に新しい研究スタイルを示す範となるべき研究が登場したことを高く評価したい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成21年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降